

日本社会への警告の書

鳴かずにのカッコウ

手嶋 龍一 著



物語はウクライナのポーランド国境に近いリヴィウから始まる。

「なぜかトイレット・ペーパーがうず高く積まれていた。ロシアのプーチン大統領の顔が黒いインクで印刷されている」

著者と一緒に取材現場に立ち会うかのように一気にスリリングな世界に引きずり込まれる。その後、舞台は北海道の根室を経て主人公が勤務する公安調査庁(公調)の神戸公安調査事務所に移る。

公調は破壊活動防止法や団体規

制法に基づいて調査対象組織の監視を続ける日本の情報機関の一つだが、内情はベールに包まれている。その公調が人知れず静かな変質を遂げていることはうすうす感じていた。

2020年7月、短いニュースが流れた。中国でスパイ罪に問われ、服役した日本人男性が刑期満了で出所し、帰国したというものだった。記事の中にこんな記述があった。

「日本政府はスパイ行為を否定

しているが、中国は男性を公安調査庁の協力者だとみなしている」

明らかに従来の公調のイメージとは異なる役割が顔をのぞかせた。変転する国際情勢とインテリジェンスの世界を知り尽くす著者が公調を取り上げること自体にメッセージを感じる。本書にも著者の思いがにじむ。

「(公調は)『最小にして最弱の諜報機関』とみなされているが、いつの日か意外に有効な手札として使えるかもしれない」

もちろん本書は単なるスパイ小説でもなければ、公調の内情を描いた潜入ルポでもない。若きインテリジェンス・オフィサーの成長と重ねながら米中関係など現在進行形の国際社会の構造、力学を浮かび上がらせる。インテリジェンスにあまりに無頓着な日本社会に対する「警告の書」でもある。

「ウルトラ・ダラー」「スギハラ・サバイバル」で日本のインテリジェンス小説に新たな地平を切り拓いた著者の取材力、分析力、そしてそれを描き切る筆力はますますさえる。物語とともに語られる宗教、文化、歴史をめぐる涉獵も知的好奇心を刺激してやまない。

〆後藤 謙次〆政治ジャーナリスト〆

(小学館・1870円)